

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 1日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21330122

研究課題名（和文）若者のキャリア形成過程と支援に関する国際比較研究

研究課題名（英文）Cross-national research on youth career development process and support

研究代表者

岩上真珠（IWAKAMI MAMI）

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：70213270

研究成果の概要（和文）：日本では初職への入職経路が標準的移行以外の入職者は長期にわたって不利である。また、国際比較を通じてみると、非正規雇用率や収入および職業上の達成意欲のジェンダー差が4カ国中もっとも大きい。若者の初期キャリア形成パターンは、各国の労働市場の態様および制度に対応して多様である。若者のキャリア支援のためには、今後、学校から仕事への多様性分析と併せて、当該社会の主要な価値観などの文化的要因を視野に入れた分析が必要である。

研究成果の概要（英文）：In Japan, there is a disadvantage over the long-term hiring of the standard transition other than hiring route to the first job. If you look through the international comparison, gender differences in achievement motivation, occupational income and non-regular employment rate is the highest in the four countries. Initial career patterns of young people, are diverse in response to institutional aspects and the labor market in each country. For the career support of young people, together with the diversity analysis of school-to-work, analysis with a view to cultural factors such as the major values of the society is required.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
2010年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総計	14,600,000	4,380,000	18,980,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：成人期への以降、家族、若者、キャリア形成、ジェンダー、国際比較、社会政策

1. 研究開始当初の背景

人口高齢化、未婚率の上昇、第一子出産年

齢の上昇、少子化、経済危機と労働市場の変容にともなう若年失業率の増大、さらには職業取得の道筋の多様化といった現象は、日本

だけに限らない世界的な趨勢でもある。国連は2010年を「国際若者(youth)年」と定め、若者への国際的な着目と積極的な関与を表明した。このことは、若者の問題は、国際的なテーマであることを認識し、各国が有効な国内対策をとることを要請したものである。EUコミッションは近年、若者の生活に関する大掛かりな調査を実施し2009年にその報告書を出しているが、そこでのおもな指摘は、次の通りである。①高齢化する社会で若者の比率が相対的に縮小している、②親からの巣立ち、結婚、子どもをもつことは急がれていない、③将来に備えて、義務教育終了後も教育期間が長期化している、④学校から職業へという労働市場への道筋(path)が多様化している、⑤若者はインターネットなどの新しい方法で世界と相互作用し始めている。これらの指摘は、EU圏のみならず北米やアジア、そしてむしろ日本にもあてはまる。

子どもから大人になるライフコースの道筋には、多くの重要な節目がある。たとえば、進学や就職のために親の家を出る(離家)、結婚もしくはパートナー関係の形成、親になる、などである。報告書では、この道が一方向(one-way)ではなく、安定した仕事や十分な収入を確保することの困難や、カップルや婚姻の解消によって、一度親の家を離れた若者が再び舞い戻ってくることはしばしばあることも指摘されている。学校から仕事への移行のパターンが多様化しているという指摘もまた注目される。今日、学校から仕事へという道筋もまた、離家と同様 one-way ではなくなっていると説明している。

さて、日本でも1990年代初めのバブル崩壊以降、経済危機をきっかけに、若者をめぐる現象がさまざまな点で注目されるようになってきている。若者に関しては、未婚化やフリーターの増加、親への長期依存など、80年代半ば頃から今日につながる現象が指摘されていたが、当初はいずれも、「豊かな社会」に生まれ育った若者の親や社会に対する「甘え」、それを許容する親の側の過保護という見方が主流であったように思われる。しかし、そうした80年代の「バブリーな時代」を経て、90年代半ばからの経済の急激な冷え込みとともに、90年代の終わりごろから、別の視点であらためて若者に焦点が当てられるようになった。つまり、未婚化やフリーター問題、親との長期同居という現象が、経済動向や労働市場と関連して説明されるようになった。また、長期にわたる若者の親との同居をめぐっては、それまでは日本の若者の自立志向の弱さ、もしくは家族制度に由来する居住慣行と結びつけて論じられていたが、景気の悪化と労働市場の変容のなかで、これもまた経済的要因と関連させて説明されることが多くなった。それはまた、「独立した大人」

に至る若者の初期段階の職業キャリア形成の長期化、多様化、困難を表すものとしてとらえられると同時に、グローバル化のなかでの「家族」のもつ階層再生産機能、もしくは階層固定化機能の古くて新しい側面としても注目される。

上述の若者を取り巻く環境の変化は、グローバル化と呼ばれる1980年代以降に顕著になった世界的な社会変動と連動している。グローバル化と市場の流動化という新たな事象の中で、若者がどのように初期キャリアを形成しているのか、そこにはどのような困難があるのかという問題意識が、本研究の背景である。

2. 研究の目的

若者の初期キャリア形成の時期は、学校から仕事へ、そして経済基盤を得て自らの家族を形成するという、「大人」として社会に位置づけられる過程(成人移行期)と重なる。一般的にそれは、長期化、多様化している。今日、学校から仕事への道筋は、完全に学校から離れると同時に「正規の」職業上のポジションを取得する従来の理念型どおりの「直進的」なものから、学校と仕事の領域を行ったり来たりするもの、学校と仕事、あるいは複数の仕事の領域で、同時に複数のポジションをコマ切レ的にもつものまで、いくつもの道筋がある。さらにそれに対応して、親からの独立や離家の時期、パートナー関係の形成もしくは新しい家族形成の時期や形態も多様化している。

今日、どのように自らのキャリアを形成するかについての標準化されたライフコースのモデルはないとはいえ、将来におけるリスクを考慮すれば、30代までに職業上の「安定的な」ポジションを得ることは、若者にとっては1つの目安であり、また目標であろう。パートナー関係の形成や結婚、さらには子どもをもつといった家族キャリアは、そうした職業キャリアにおける目標の達成と連動している。非正規雇用から出発することが往々にして問題になるのは、日本の労働市場が柔軟ではないため、正規雇用への中途参入が難しく、安定した将来の職業生活への青写真が描きにくいからである。こうした経済的不安定は、家族キャリアの形成にも影響を与える。日本でも、2000年以降「非典型」雇用から出発する若者が増えてきているが、非正規から正規への移行が困難な労働市場のあり方とあいまって、「非典型」雇用からのスタート組はなかなか安定的な職業キャリアにたどり着けず、そのことが結婚やパートナー関係の形成を難しくしていると指摘されている。

本研究の目的は、①不透明で不安定な時代における若者の初期キャリア形成の現状と

課題を、国際比較を通じて浮き彫りにし、②各国のキャリア形成のジェンダー格差を明確にしたうえで、③わが国における必要な支援の方法を提示することである。

3. 研究の方法

本研究では、国際比較研究の手法がとられた。国際比較研究の目的は主として2つある。第一に、ある「現象」が各国ではどのように表れているか、その現象の相対的な位置を当該国以外との比較から知ることであり、また第二に、その「現象」は各国によってどのように受け止められているか、当該社会における固有の位置づけを同様に知ることである。そうした比較的手法は、たとえば先進社会における若者のキャリア形成という「現象」のもつ意味を相対的に理解し、その「現象」が当該社会の社会構造や社会制度とどのような関連性を有するかの考察にとって不可欠である。完全にはコントロールできない変数間の比較の限界はあるものの、当該社会の固有の「現象」を、比較を踏まえたグローバルな文脈において考察することは、その現象の多角的な理解のための有効な研究方法であると考えられる。

また、国際比較にあたってのもう1つのねらいは、各国のキャリア形成に関するジェンダー差の分析にある。そのため、すべてのデータはジェンダー比較ができるように設計した。グローバル化の進展とともに、相対的に若者のキャリア形成が困難になっている現実を確認するとともに、それがジェンダーにおいてどのように現れるか、ジェンダー格差解消の課題は政策面でどのように対応しうるか、という問題意識も本研究に通底するものである。

実査としては、大都市在住の25~30歳男女を対象に、共通の質問項目を用いた構造化調査を、各国のカウンターパートと連携して実施した。各国とも男女500ずつ、合わせて1,000票の標本確保を目指した。調査期間は2007~2010年である。調査方法は各国の事情により異なる。日本では、住民基本台帳からの層化二段抽出法による郵送調査、韓国とカナダではモニターによるインターネット調査、イタリアではコンピューター電話調査を実施した。なお、韓国では実際の調査対象年齢として25~34歳、カナダでは18~34歳が設定されたため、この両国においては、25~30歳の4カ国比較当該年齢の標本数が相対的にやや小さくなっている。

4. 研究成果

国際比較研究の結果、主として次のような知見が示された。

(1) 日本では、初職(学校を卒業して初めて就く職)への入職経路と学校から職業への移行期間に着目し、標準的移行以外の入職者は長期にわたって不利である。また正規雇用と非正規雇用の格差とともにジェンダー格差も依然大きい。

(2) 初期キャリア形成のジェンダー差の4カ国比較の結果、非正規雇用率や収入および職業上の達成意欲のジェンダー差は、日本がもっとも大きい。

(3) 韓国では80年代半ば以降、急激な高学歴化が進んだが、他方で97年の経済危機以降失業率が高まり、男女ともに非正規雇用化も進んだ。また18歳男子の兵役義務がキャリア形成に固有の影響を与えている。韓国政府は97年の経済危機を受け、2000年代に若者の雇用対策に乗り出したがいまだ効果が見えない。

(4) 日本と韓国の2カ国比較の結果、日韓とも女性の就業率が低く、かつM字型カーブを描いており、女性が非正規雇用になる傾向があり、日韓ともにジェンダー格差がみられる。また日本では学歴が男女ともに正規雇用と結びつくが、韓国では統計的に有意ではない(韓国の過激な受験競争への疑問)。

(5) イタリアでは、「プレカリアート(=イタリア語で「不安定」を意味するプレカリオ+貧困層プロレタリアートの造語)」と呼ばれるイタリアの若者が社会問題として捉えられている。

(6) イタリアでは若者が親と同居する割合が高く、その長期化が顕著である。ただし、若者のキャリア形成の困難は、不況と市場の不安定化という経済的要因だけでなく、若者の「現在志向性」やプラグマティズムといった、イタリアの伝統的な文化的要因にも由来している。

(7) イタリアでは、学校終了と職業キャリアのスタートが不連続でかつ一様ではない。そうした社会背景における学校から職業への移行を含めたライフコース分析のためには、教育システムと労働市場の関係の分析だけでなく、若者が自らの将来像を描けない現状を知ることが必要であり、階層問題や当該社会の主要な価値観などを組み込んだ文化的アプローチが重要である。

(8) イタリアのジェンダー問題をみると、一般的に女性の就労率は低く、かつ失業率は高い。ミラノにおいてさえ(イタリアでは南北の地域差が大きく、北部のミラノは最も進歩的な土地柄の1つである)、伝統的な性別役割観は根強く残っており、女性はいまだ雇用において不利な条件下に置かれ、その結果、女性たちの職業キャリア満足度は低い。

(9) 民族的・人種的な多様化の進むカナダの労働市場は柔軟で、一般的に、若者は何回か転職したのちに自分のキャリアだと思

う仕事に行きつく。ジェンダー差も小さい。

4 カ国比較を通じて、キャリア形成パターンは各国の労働市場の態様に依りて多様であることが示された。日本では、非柔軟な労働市場やジェンダー格差の解消に向けた総合支援対策が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計20件)

1. 岩上真珠、日本の家族・世帯の変動：未婚化、少子・高齢化、個人化のなかで、生活協同組合研究、査読無、423、2011、15-12頁

2. 宮本みち子、変容する日本型雇用の下での若者、生活経済政策、査読無、588、2011、6-9頁

3. 宮本みち子、早期に社会へ出る生徒のために：キャリア教育・職業教育再考、教育展望、査読無、57(6)、2011、28-33頁

4. 宮本みち子、学校から社会への移行につまずく若者の支援をめぐる、月刊高校教育、査読無、44(1)、2011、40-43頁

5. Tsuchiya, Junji, “How Can Japan’s ‘Galapagos Syndrome’ Survive Globalization?”, Zone Moda Journal: La Cultura della Moda Italiana-Made in Italy, 査読無、2、2011、254-258頁

6. 大槻奈巳、NPO活動と女性のキャリア形成、季刊家計経済研究、査読無、89、2011、122-138頁

7. 大槻奈巳、いまだんな女性人材が求められているか：若年キャリア形成の視点から、NVEC実践研究、査読無、1、2011、20-35頁

8. 宮本みち子、若者研究における研究者・行政・NPOの連携、家族研究年報、査読無、35、2010、85-90頁

9. 宮本みち子、子ども・若者育成支援推進法とは何か、人間と教育、査読無、68、2010、63-67頁

10. 宮本みち子、困難な条件をもつ若者に対する就労支援：包括的支援がなぜ必要か、都市問題、査読無、101(12)、2010、57-63頁

11. Tsuchiya Junji, La Rivoluzione Ontologica del Corpo: Ritorno dal Mondo Virtuale al Reale. R. Romeo and P. Canestrari (eds.), Dall’Uomo All’Avatar e Ritorno: Realta’ e Dimensioni Emergenti、査読無、2、2010、237-253頁

12. 土屋淳二、<アルタ・モーダ>から<モーダ・エティカ>へ：グローバル・ファッションへの《イタリアへの道》、日伊文化研究、査読無、48、2010、12-21頁

13. 大槻奈巳、男性、子どもにとっての男女共同参画と社会教育、社会教育、査読無、65(6)、2010、12-17頁

14. 大槻奈巳、雇用不安定化におけるジェンダー格差：男性・女性それぞれの困難、現代日本の働き方を問う：規制緩和下の労働と生活、労務理論学会誌、査読無、192、2010、97-111頁

15. 渡辺美穂、女性差別撤廃条約(人権条約と日本政府報告審査)、子どもの権利研究、査読無、17、2010、82-87頁

16. 宮本みち子、若者の貧困を見る視点、貧困研究、査読無、2、2009、59-71頁

17. 宮本みち子、社会学の観点からみた成年年齢の引き下げの意味、ジュリスト、査読無、No.1392、2009、168-175頁

18. Tsuchiya, Junji, Viterbo: Sette Città, “Dal Multiculturalismo al Multirealismo nel Giappone Postmoderno,” in S. Ferreri (a cura di), Plurlinguismo, Multiculturalismo e Apprendimento delle Lingue: Confronto tra Giappone e Italia, Atti del Convegno Internazionale、査読無、2009、249-260頁

19. Aiello, G., Raffaele, D., Gody, G., Perderzoli, D., Wiedman, K., Hennings, N., Siebels, A., Chan, P., Tsuchiya, J., Rabino, S., Ivanovna, S., Weitz, B., Oh, H., Singh, R., “An international perspective on luxury brand and Country of Origin Effect”、Journal of Brand Management、査読有、16(5-6)、2009、323-337頁

20. OTSUKI Nami and HATANO Keiko, “Japanese Perceptions of Trafficking in Persons: An Analysis of the ‘Demand’ for Sexual Services and Politics for Dealing with Trafficking Survivors”, Social Science Japan Journal, 査読有、12(1)、2009、

[学会発表] (計 12 件)

1. 酒井計史・岩上真珠・宮本みち子・土屋淳二、初期キャリア形成に関する国際比較研究：日本、韓国、イタリア、カナダの大都市圏の若者調査より、第 84 回日本社会学会大会、2011 年 9 月 17 日、関西大学・千里山キャンパス (大阪府)
2. 大槻奈巳、若者の稼ぎ手役割意識の揺らぎ、第 84 回日本社会学会大会、2011 年 9 月 17 日、関西大学・千里山キャンパス (大阪府)
3. Tsuchiya Junji、Robot Society: L' Epoca Postuomo e Identita' Ibrida del Giappone Conference at Universita degli Studi di Venezia Ca' Foscari, 2011 年 3 月 1 日、ヴェネツィア大学大講堂 (イタリア)
4. 宮本みち子、成人期への移行政策の課題と構想、労働政策フォーラム・労働政策研究・研修機構 (JILPT) / 日本学術会議、2010 年 7 月 3 日、招待、浜離宮朝日ホール・小ホール (東京都)
5. 酒井計史・岩上真珠・岡本英雄・宮本みち子・土屋淳二・大槻奈巳・渡辺美穂・平田周二、若年者の家族・キャリア形成に関する国際比較研究、日本社会学会第 82 回大会、2009 年 10 月 12 日、立教大学池袋キャンパス (東京都)
6. 大槻奈巳、雇用不安定化のなかで男性の稼ぎ手役割意識はかわるのか、日本社会学会第 82 回大会、2009 年 10 月 12 日、立教大学池袋キャンパス (東京都)
7. 大槻奈巳、国際比較調査によってわかること」、ラウンドテーブル「国際比較調査をどう読み解くか：家庭教育 6 か国比較調査を行って」、日本家族社会学会第 18 回大会、2009 年 9 月 13 日、奈良女子大学 (奈良県)
8. 酒井計史、調査結果をどう分析しどう読み解くか、ラウンドテーブル「国際比較調査をどう読み解くか：家庭教育 6 か国比較調査を行って」、日本家族社会学会第 18 回大会、2009 年 9 月 13 日、奈良女子大学 (東京都)
9. 大槻奈巳、雇用不安定化におけるジェンダーステータス格差：男性・女性それぞれの困難、統一論題現代日本の働き方を問う：規制緩和下の労働と生活、労務理論学会第 19 回全国大会 2009 年 7 月 19 日、招待、駒沢大学 (東京都)

10. 大槻奈巳、介護職における感情労働の評価に関する分析、社会政策学会第 118 回大会、2009 年 5 月 24 日、日本大学 (東京都)

11. Tsuchiya, Junji、Nuove Sinergie tra Moda Responsabile e Tecnologia Sostenibile in Giappone、XI Convegno Internazionale "Ethical Fashion: Moda Critica"、2009 年 5 月 8 日、Aula Magna, Università Cattolica del Sacro Cuore di Milano, Milano (イタリア)

12. Tsuchiya, Junji、"Social Situation on Luxury Brands in Japanese Market, Research Presentation: Luxury Brand and Country of Origin Effect, International Research 2007-2008", Faculty of Economics, University of Florence, 2009 年 1 月 27 日、Firenze (イタリア)

[図 書] (計 13 件)

1. 宮本みち子、筑摩書房、若者が無縁化する：仕事・福祉・コミュニティ、2012、全 214 頁
2. 大槻奈巳ほか (共編著)、大月書店、成長と冷戦への間い(高度成長の時代 3)、2011、237-282 頁 (全 348 頁)
3. Otsuki, Nami ほか (共著)、Feminist Press: NY, Transforming Japan, 2011、302-313 頁 (全 407 頁)
4. 大槻奈巳ほか (共著)、財団法人日本女性学習財団、女性のキャリア形成支援ハンドブック 2011、23-29 頁 (全 80 頁)
5. 岩上真珠 (編著)、青弓社、<若者と親>の社会学、2010、7-21 頁・168-189 頁 (全 201 頁)
6. 岩上真珠ほか (共著)、弘文堂、いま、この日本の家族：絆のゆくえ、2010、1-10 頁・90-131 頁・187-194 頁 (全 221 頁)
7. 岩上真珠ほか (共著)、大月書店、過熱と揺らぎ (高度成長の時代 2) 2010、209-262 頁 (全 348 頁)
8. 大槻奈巳ほか (共著)、ミネルヴァ書房、国際比較にみる世界の家族と子育て 2010、90-107 頁・113-119 頁 (全 204 頁)
9. 酒井計史ほか (共著)、ミネルヴァ書房、国際比較にみる世界の家族と子育て、2010、

47-70 頁・165-168 頁 (全 204 頁)

10. 宮本みち子ほか (共著)、学文社、新たなる排除にどう立ち向かうか、2009、61-79 頁 (全 280 頁)

11. 宮本みち子ほか (共著)、勉誠出版、平成異変：打開のリーダー、2009、46-68 頁 (全 338 頁)

12. 土屋淳二、学文社、モードの社会学 (上)：ファッション帝国の<裸のプチ玉様>、2009、全 207 頁

13. 土屋淳二、学文社、モードの社会学 (下)：自由と束縛をめぐるファッション力学 2009、全 170 頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

1. 岩上真珠研究成果報告
<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/department/major/4/iwakami.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩上 真珠 (IWAKAMI MAMI)
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号：70213270

(2) 研究分担者

岡本英雄 (OKAMOTO HIDEO)
上智大学・総合人間科学部・教授
研究者番号：20119126
(H21～H22)

宮本みち子 (MIYAMOTO MICHIKO)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：60110277

大槻奈巳 (OTSUKI NAMI)
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：30356133

土屋淳二 (TSUCHIYA JUNJI)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80287937

渡辺美穂 (WATANABE MIHO)
独立行政法人国立女性教育会館・
研究国際室・研究員
研究者番号：40415352

酒井計史 (SAKAI KAZUFUMI)
独立行政法人国立女性教育会館・
研究国際室・客員研究員
研究者番号：00415358
(H21→H22 連携研究者へ)

(3) 連携研究者

酒井計史 (SAKAI KAZUFUMI)
独立行政法人国立女性教育会館・
研究国際室・客員研究員
研究者番号：00415358
(H22～H23)

(4) 研究協力者

平田周一 (HIRATA SYUICHI)
独立行政法人労働政策研究・研修機構・
主任研究員
研究者番号：なし
(H21～H23)